

●復刻の辞

『新亜細亞』は、一九三九（昭和一四）年八月から一九四五（昭和二〇）年一月まで、満鉄東亜經濟調査局が発行した雑誌である。大川周明が中心となって作られ、創刊の辞及び各号巻頭言を執筆している。創刊の辞では、「国民は亜細亞のことに關して無関心である」とし、「ここに月刊『新亜細亞』を発行し、西南亜細亞並びに南洋諸島に關する知識の普及に努めることとした」とある。地理的には西アジア・南アジア・東南アジアからオセアニアまで、また内容的には政治・經濟・宗教・民族・美術・文學と幅広い。イスラーム關連の記事に力をいれているのも本誌の大きな特徴である。当時の日本のアジア認識を知るために必須の資料である。

不二出版

満鉄東亜經濟調査局 発行

【復刻版】

新 亜 細 亞

全19卷

別冊1

●体 裁——A5判・上製・総10、256頁

●別 冊——解題（白杵陽 日本女子大学文学部教授）・総目次・索引

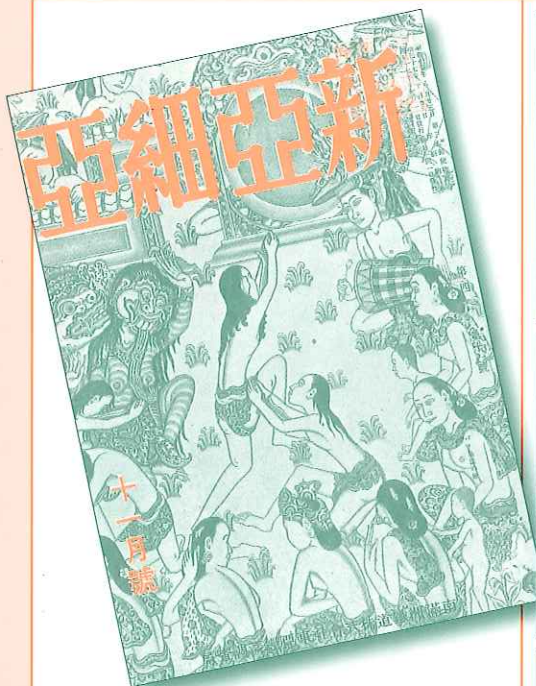
このみ分売可 本体価格1、000円＋税

ISBN 978-4-8350-7069-8

●定 価——本体揃価格418、000円＋税（全5回配本）

●原本提供——一橋大学經濟研究所

●推 薦——大塚健洋・倉沢愛子・中島岳志・山内昌之



復刻版『新亜細亜』を

推薦します

大塚健洋

(姫路獨協大学法学部教授)

『新亜細亜』は、大川周明の発案により、一九三九年八月から一九四五年一月まで、満鉄東亜経済調査局から刊行された月刊雑誌である。編集長は、大川がその著「ガンディ」を絶賛した坂本徳松であった。大川は「創刊の辞」において、アジア復興の機運がみなぎる中、いざれ全アジアが日本と英・仏・蘇との角逐の舞台になるであろうと想定し、「西南亜細亜並びに南洋諸国に関する知識の普及に努めることとした。この雑誌は、此等の諸国の政治・経済・文化の各方面に亘り、最も信頼すべき報道者たることを期する」と述べている。

この前年、彼は東南アジア・インド・中近東のエキスパートを養成するために、東亜経済調査局附属研究所、通称大川塾を創設しているが、雑誌『新亜細亜』による国民の啓蒙と、東亜経済調査局とその附属研究所を通じての研究者・専門家の育成は、一体不可分のものであったと思われる。

『新亜細亜』には、当時の最高水準のアジア情報が満載され、今日においても貴重な資料となっている。また、同誌に寄せた大川の巻頭言は、「つぎつぎに心頭に去来せる感想の正直な記録」であり、変転する時局に対する彼の生々しい認識をうかがうことが出来る。貴重な歴史的資料である『新亜細亜』の復刊を、研究者として歓迎したい。

戦前・戦中の地域研究の厚みを
実感させる貴重な文献

倉沢愛子

(慶應義塾大学経済学部教授)

『新亜細亜』は、「大東亜」戦争開戦前夜の一九三九年八月から、終戦の年（一九四五年）の一月まで五年半にわたり満鉄東亜経済調査局から刊行された月刊誌である。創刊の辞やその後の号における巻頭言を当時重要なイデオログであった大川周明が書いているのは興味深い。各号約二〇名の、外国人を含む執筆者が政治、経済、文化、地理など幅広いトピックで論考や随筆を書き、毎号一六〇頁を超える厚さになっている。通算で六六号刊行されているので、単純に量的にだけ見ても非常に多くの情報が盛り込まれている。しかもその内容は単なる地域の概説の域を超え、非常に特殊的、専門的になっていて、地域研究としてのレベルはかなり高い。「亜細亜」とは言っても、中国、朝鮮、満蒙等の東アジアは相対的に少なく、主たる対象地域は南アジア、東南アジアになっているのも特徴である。またイスラームに関する関心も数多く見出される。当時これらの地域やトピックに関して専門的な論考を書ける研究者が、かくも多くいたというその層の厚さにも驚く。

この復刻によって戦時期の南アジア・東南アジアの研究は、さまざまな隙間をうめることができるようになるだろう。さらにこの月刊誌を手にとつて通念的に眺め、その中で取り扱われた新奇なトピックを一つひとつ注目することによって、これまで特に重視されていなかった事柄の中に、実は時局的に重要な意味が含まれていた事に気づくようなことも有るかもしれない。この時期を研究する者の一人として興奮を禁じえない。

アジアという思想課題に

向き合うために

中島岳志

(北海道大学公共政策大学院准教授)

『新亜細亜』は「近代日本のアジア観」を考察する上で、第一級の史料である。この雑誌を牽引した大川周明は、毎号「巻頭言」を書き、日本のアジア認識の方向付けを行った。この連載はのちに『新亜細亜小論』として出版され、一九四〇年代前半の大川の世界観を示す重要文献となっている。

この雑誌の意義は、戦中のアジア認識を概観するだけに留まらない。ここには大川に場所を与えられた若きアジア研究者が名を連ね、その思想の土台を形成していた。

前嶋信次、井筒俊彦、坂本徳松……。

彼らは戦後の思想空間において重要な位置を占め、アジア研究を牽引した。

我々は一九四五年で思想を分断する傾向があるが、当然の如く、人間は連続している。

戦前と戦後——。「大東亜戦争」の敗戦によって、帝国主義的なイデオロギーは崩壊した。しかし、思想としてのアジアは終わっていない。日本人は一九四五年に何を捨て、何を継承したのか。アジア主義とは何だったのか。

『新亜細亜』には、「アジア」を考究するための無数の素材が散りばめられている。「アジアの時代」が叫ばれる中、かつての日本人は「アジア」に何をしようとしたのか。

片付かない「アジア」という問題を、いま一度、問い返したい。

アジア地域研究の先駆

『新亜細亜』の復刻を喜ぶ

山内昌之

(東京大学大学院総合文化研究科教授)

『新亜細亜』は、満鉄東亜経済調査局の出した調査研究雑誌である。その充実した内容は、シンクタンクとしての満鉄調査部の高い質と水準を反映している。まず何よりも、昭和一四（一九三九）年から二〇（一九四五）年まで続いた継続性に驚く。調査や研究には粘り強さが必要であり、満鉄のこだわりはいまの日本政府がアジアやイスラーム世界にそぞろ政策的関心を凌ぐといつても誇張にならない。

また、話題性にもあふれている。発行した中心人物は、戦前の日本で本格的なイスラーム研究に着手した大川周明だからである。

極東国際軍事裁判の被告だった大川には、アジアの姿を国民に正しく知らせようとする知識人の責任感もあったのだ。正しい大川像を構築する上でも手がかりになる発行物となるだろう。

『新亜細亜』の関心は、トルコやエジプトなど中東から、インドやタイはもとより、南洋諸島まで広がっている。日本の官民がアジアやイスラーム世界の人びとをいかに見ていたのか、未知の地域への外交や政策をどのように決定したのか。こうした点を知る上で今後の研究の頼りになるだけでない。アジアをこよなく愛する市民の探究心や、イスラームに興味をもつ読書人の知的欲求をも満足させる雑誌であることは疑いない。

『新亜細亜』の復刻出版を心から喜びたい。



新亞細亞 創刊號 目次

表紙 沙漠の駱駝
口絵 ①ガシム河に遊る遊牧民(印度、パルシ) ②騎車を導くベンガル婦人 ③米を担ぐ(パルシ) ④新亞細亞の旗 ⑤新亞細亞の旗 ⑥新亞細亞の旗 ⑦新亞細亞の旗 ⑧新亞細亞の旗 ⑨新亞細亞の旗 ⑩新亞細亞の旗

創刊の辭 大川周明

パレスチン問題と英國の苦境 米田實

印度の眺望 野口米次郎

亞細亞の肢脚タイ國 磯部美知

宗教的に見たイラク國 生禮一

イラン國の全貌 大久保武雄

南洋風物誌(繪と文) 染木照

夏の沙漠を行く 笠間杲雄

筆隨土風 久留島秀三郎

新嘉坡 西永義文

新亞細亞 西永義文

復興亞細亞の諸問題を語る 八

嘉治隆一 矢田部保吉 木村日紀

高岡大輔 三浦伊八郎 小林元

栗原正 太田少佐 門松少佐

生活記 外道の顔 野生司 香雪二四

東南アジアに於ける國際航空路 本田敬之三〇

馬來文學の過去と現在 宮武正道 二四

印度民話 黄金の積 ショウオナ・デヴィ 一五

編後記 北川民次

目次 カット 北川民次

扉・カット 野村省三・宮上繁・深谷亮

●主要執筆者一覧

Table listing authors and their works. Columns include author names (e.g., 相川春喜, 阿部武道) and their respective articles.

新亞細亞 創刊號 目次

日米戦争の世界史的意義 大川周明
日本とアメリカは、天意か偶然か、一は太陽を以て、その對立は、宛も白日と暗夜との對立を意味して居る。故に...

アジア展望 起り上る印度

ネールの日支觀
去七月下旬より約一月に亘り支那印度國際會議の開幕觀察の爲め、最近編輯の左翼の領袖ネールは、最近編輯の左翼の領袖ネールの公會堂でその演説を試みた。



創刊の辭

世界を轉期として、亞細亞史の新しい頁が書かれ初めた。獨逸側に參照せるが故に、將に世界地圖の上から抹殺せられんとしたトルコは、ムスタファ・ケマルの奮起により、逆運のどん底から一躍復興の一路を邁進し初め、擧ぐるどころの強國は、いまや利銀の如く小亞の天に浴せ居る。久しく世界の進行と風馬なりし沙漠のアラビアの只中に、火の如く熱烈なる信仰と、萬難不屈の剛志に燃ゆるイブン・サウダが、波瀾重疊の間に一個の偉大なる「神國」を建設した。世界に當然中立を守りしベルシアは、阿拉伯の野心的ために、交戰國の或るものよりも甚しき戦禍に苦しむた上、疲弊に乘じたるイギリスの野心のために、獨立國家の實を失ひ去らんとしたが、是亦英聯邦の出現によつて救はれ、いまや國號をイランと改め、レザー汗を皇帝と仰ぐ帝國となりて、向上登高の路を歩みつゝある。

〔復刻版〕新亞細亞 全19巻・別冊1

●体裁

A5判・上製・総10、256頁

●別冊

解題(白杵陽 日本女子大学文学部教授)・総目次・索引

これのみ分売可

本体価格1、000円+税

ISBN978-4-8350-7069-8

●定価

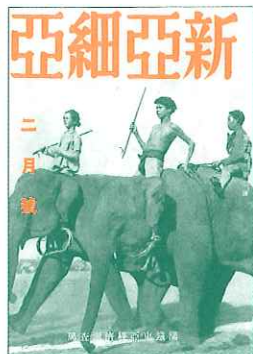
本体揃価格418、000円+税(全5回配本)

●原本提供

一橋大学経済研究所

●推薦

大塚健洋・倉沢愛子・中島岳志・山内昌之



●関連図書のご案内

南洋群島文化協会 発行 「昭和10年〜昭和18年」

南洋群島 全26巻+別冊1

別冊II 解説(仲程昌徳)・総目次・索引

A5判・上製・総約10、300頁

揃定価 本体416、000円+税

推薦II 石川友紀・今泉裕美子・須藤健一・山口洋児

第5回配本		第4回配本		第3回配本		第2回配本		第1回配本		配本
第一九巻	第一八巻	第一七巻	第一六巻	第一五巻	第一四巻	第一三巻	第一二巻	第一一巻	第一巻	復刻版
六巻五号〜七巻一号	五巻一、二号〜六巻四号	五巻八号〜五巻一、二号	五巻五号〜五巻七号	五巻二、三、四号	四巻一、二、三、四号	四巻八号〜四巻一、二、三、四号	四巻五号〜四巻七号	三巻一、二、三、四号	三巻一、二、三、四号	原本の巻号
一九四四年五月〜四五年一月	一九四三年一月〜四四年四月	一九四三年八月〜十一月	一九四三年五月〜七月	一九四三年一月〜四月	一九四二年一月〜四月	一九四二年五月〜七月	一九四二年二月〜四月	一九四一年一月〜四月	一九四〇年八月〜十一月	原本の刊行年月
2013年9月 本体88,000円+税 ISBN978-4-8350-7064-3		2013年4月 本体88,000円+税 ISBN978-4-8350-7059-9		2012年9月 本体88,000円+税 ISBN978-4-8350-7054-4		2012年4月 本体88,000円+税 ISBN978-4-8350-7049-0		2011年12月 本体66,000円+税 ISBN978-4-8350-7044-5		

かつて「海の生命線」と称された島々―南洋群島。多くの沖繩出身者を含む日本人移民たちは、原野を拓き、産業を興し、約十万人の町を築いた。本誌は、南洋庁の宣伝雑誌という一面はあるが、南方の委任統治領における日本人の動向や生活の実態を具体的に知る上で最も貴重な資料である。誌面には南洋庁長官などの論説、視察記事、経済・産業・民族・民俗に関する研究報告に加えて、随筆や紀行文、日本人移民による文芸作品も掲載されている。戦前期ミクロネシア文化圏で刊行された唯一の総合文化雑誌。

表示価格は、全て税別

不二出版

〒113-0033 東京都文京区向丘1-1-11
TEL 03-3821-4433
FAX 03-3821-4464
振替 0016012194084